

「あかちゃんてね」をよんで

猿楽小学校 一年一組 小田 讚良

わたしがこのほんをえらんだのは、いえに一さいのあかちゃんが
いるからです。このほんは、うまれてすぐから一さいまでのあかちゃん
のようすをしゃしんとともにしようかいています。

わたしぐらいのおねえちゃんが、いもうとがうまれて、あか
ちゃんすごしたひびのかんそうをいっています。だから、わたし
もいもうとであるあかちゃんくらべながら、きもちがよくわか
るなあとおもいながらよみました。

一ばんころろにのこったのは、あかちゃんが十一カ月でひとり
であるくばめんです。わたしも、いもうとがあるきはじめてとき
のうれしいきもちをおもいできました。あかちゃんのせいちょう
は、なんてはやいんだろうとおもいました。

ほんのあかちゃんとわたしのあかちゃんのときのしゃしんはに
ているけれど、いまのわたしとは、もちろんぜんぜんにいていな
いです。わたしも、すごいスピードでせいちようしているのです。

ほんのおねえちゃんは、いもうとがうまれて、おもちゃをか

てといわれたり、じてんしゃでおでかけできなくなったりして、さみしくなったりこまったりしていました。でも、わたしはいもうとがうまれてこまったことは、ほとんどありません。さみしくなったこともあんまりありません。なぜなら、いもうとがとつてもかわいいからです。あかちゃんのせいちようはとつてもはやいので、かわいいあかちゃんとすごすじかんをたいせつにしたいです。



「ふたりは、ともだち」をよんで

猿樂小学校 二年二組 大須賀 杏奈

がまくんとかえるくんは、とてもなかよしです。やさしいかえるくん、ちよつとわがままながまくん。二人はぜんぜんちがうせいかくだけど、いつもいっしょです。この本を読んで、「友だちってなんだろう。」と考えさせられました。

小学校に入学し、わたしにはたくさん新しい友だちができました。知っている子は一人しかいなくてさびしかったけれど、自分から、「友だちになろう。」と声をかけました。今では、みんな友だちです。

その中でも、わたしには、とてもなかよしになった友だちができました。その友だちは、やさしくておねえさんみたいです。わたしのわがままを、いつも聞いてくれます。まるでわたしたち二人は、かえるくんとがまくんのようです。時どきけんかもします。そんなときは、わたしから友だちにあやまるようにしています。だって、やさしい友だちをおこらせてしまうからです。でも、友だちは、この話のかえるくんのように、わらってゆるしてくれま

す。わたしが、おかあさんとけんかしてなやんでいるときは、いつもとなりで話を聞いてくれます。二年生になり、わたしたちはクラスがべつべつになりました。休み時間やほうか後クラブでは、いつもいっしょです。

かえるくんがまくんは、とてもなかよしです。わたしは、この本をすぐにすきになりました。がまくんのわがままにいやな顔をせず、いつもそばにいるかえるくん。でも、かえるくんは知っています。本当は、がまくんがやさしいことを。

夏休みがおわったら、こんどは友だちといっしょにこの本を読みたいですね。そして、「わたしたちみたいだね。」とわらい合いたいです。



お父さんとの大切な時間

神宮前小学校 三年一組 喜多 栄友

この夏、ぼくのお父さんは、広島にてんきんになりました。広島に行ってしまう当日の朝、お父さんに

「今日からすこしの間、いっしょにいられなくなるけれど、おべん強がんばったり、お母さんのお手つだいをしたり、お母さんの言う事よく聞くんだよ。」

と言われて、本当に今日からお父さんと、はなればなれになってしまうのかと思うと、なみだがとまらなくなりました。

「お父さん、バイバイ」

げんかんを出て、お父さんのうしろすがたが見えなくなるまで、手をふりつづけました。へやにもどり、本だなにある本をながめていたら、「パパはジョニーっていうんだ」と言う本があったので、パパ？どんな物語なんだろうと思い読んでみることにしました。

ティムと言う男の子が、ぼくと同じでお父さんとはなれて住んでいます。ひさしぶりにお父さんが会いに来てくれて、帰りの夜の電車までの間、二人でホットドッグやさんに行ったり、えい画かんでアニメをみたり、レストランでピザを食べたり、図書かんへ本をかりに行ったり、きつさてんにいたり、一日でたくさんお出かけをしてお父さんと遊んだお話でした。

ぼくがいんしょうにのこった事は、ティムがピザやさんに行っ

てピザのまわりをのこして食べていたことです。なぜかと言うと、
ぼくもピザのまわりをのこして食べているので同じだなと思いわ
らってしまったからです。

楽しく遊んでいたけど、お父さんが帰る電車の時間がせまつて
くるにつれて、タイムもジョニーもまたしばらく会えなくなると
思うときみしくなつたと思います。

ぼくはお父さんが広島に行つてしまつたあの日から、まだ一回
も会っていません。お父さんがお仕事がお休みの日に、公園でキ
ャッチボールをして遊んだ事や、バッティングセンターに行つて、
バッティングれん習をした事や、いっしょにおふろにはいった事、
一日でたくさん遊んだ事を思い出しました。

今はお父さんと会えなくて、ぼくも、タイムと同じようにすご
くさみしいです。でもぼくは、こんどお父さんに会えるまでに、
大すきな野きゆうが上手になつているところを見てほしいので、
毎日すぶりやかべあてキャッチボールを家でがんばっています。
次お父さんとキャッチボールをするときにお父さんに上手になつ
たねと言われてみたいです。



「十歳のきみへ」を読んで

西原小学校 四年三組 新井 義人

クラスのほとんどの子がもう十歳になっています。ぼくのたん生日は十二月なので、まだ九歳です。だけど、夏休みにぜひ読んでほしい本があると、お母さんがこの本をわたしてくれました。この本は、九十五歳でまだお医者さんをやっている先生が書いた本です。

先生は、「寿命ってなに？」と聞いてきました。ぼくが思う寿命とは、「生まれてから死ぬまでの時間」です。だけど九十歳まで生きてきた先生はちがう答えを教えてくださいました。寿命とは、自分にあたえられた時間だということです。これは一人一人のからっぽの器の中に、せいっぱい生きたしゅん間をつめこんでいく、というイメージで、時間の中身は自分で決められる、というのです。

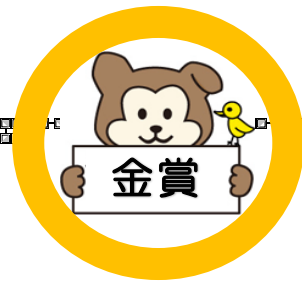
よくわからなかったので、ぼくの楽しい時間とそうじゃない時間について考えてみました。ぼくは放課後に友達と遊んでいる時、ちらっと時計を見ると、もう四時五十分だ！という事がよくあります。図工の時間にもくもくと工作していると、あっという間にチャイムが鳴ってしまいます。ぎゃくに、漢字の練習の時はすごく長く感じます。それをたとえると、光の時間とはい色の時間という感じです。先生は本の中で、自分の入れ物の中に何をつめこむかで、時間の中身が変わると言っています。ぼくは今よりも光の時間をふやしたいなと

思いました。

先生はもうひとつ、自分の時間を人のために使いなさいと言っています。ぼくはどれだけ人のために時間を使っているだろう。せんとく物をたたむのを手伝ったり、食器をかたづけたり、学校でけがをしている友達を保健室まで連れて行きました。それしかうかんでなくて、すごく少ないと思いました。まわりの友達で、よく、ありがとうと言われている人を思いうかべてみました。先生のかわりに手紙を配る人、給食のはいぜんを手伝っている人、牛乳をこぼした人のかたづけをしてあげている人。気がつかなかったけど、こんなにみんなは、人のために自分の時間を使っていたんだなと思いました。ぼくは今日からもっと、ありがとうと言われるように、こまっている人を助けたり、家族が楽になるようにお手伝いをしたり、友達にやさしくしたいです。

最後に先生は戦争について書いています。ぼくたちは、おながすけばごはんが食べられるし、具合が悪くなったらすぐに病院でみてもらえます。だけど世界には五歳まで生きられない子どもたちがいることをお母さんに教えてもらいました。今ぼくにできることはあまりないけど、争うことをなくすために「やり返す」ことをやらない自分になりたいと思います。

先生、ぼくは時間の使い方って大切なんだとわかりました。ぼくの寿命の器に、たくさんの「ありがとう」を入れていきたいです。



本当の「生きる」とは何か

幡代小学校 五年三組 荒川 脩子

私は、『さよならエルマおばあさん』を読んで「生きる」ということは二種類あるのではないかと思いました。一つ目は、体が生きているということです。それはただ単純に内ぞうが動いているということです。二つ目は、心が生きているということです。それは自分の意思で生きているということです。最後まで自分の意思で生きようとしたエルマおばあさんを私はすばらしいなと思いました。

このお話は、猫のスターキティと余命一年と宣告されたエルマおばあさんの最後の一年間のお話です。機械や薬を使わずに「最後まで楽しみながら生きたい」と、これまでどおりの生活をつづけたいと願ったエルマおばあさんの物語です。

私の祖母は、八十才でエルマおばあさんと同じくらいのことです。私が赤ちゃんの頃から面どうを見てくれていて、働く母の代わりに、祖母が毎日、保育園にむかえに来てくれました。そんな祖母が一年前に認知症と診断され、少しずつ弱ってきました。例えば、日付や季節、人の名前が段々分

からなくなり、一週間前までできていたことができなくなるなどに直面し、私は見るのがいやになったり、ついついおこっってしまう時もあります。しかし、食事に二時間かけて一生けん命自分の力で食べようとしているのを見るたびに本当にすごいな、と思います。

私が、祖母のつめ切りを手伝った時には、祖母が「ありがとう」と何度も言ってくれるのですが、それが、もうふつうの生活ができなくなってしまったことをしようちようしているような気がして、悲しくなってしまうます。私は、これまでに祖母がどう生きるか聞いたことがありません。なぜかという、認知症だから考えても忘れてしまうのだからだと思います。

私は、自分の祖母には今のままでいてほしいだけで、どう「生きて」ほしいのかは答えが出ません。私は、二つの「生きる」についてどちらが正しいのか、答えはないと思います。そして私は、どのように生きる、という問題はすごく難しい問題だと思います。私は、エルマおばあさんのように、「心で生きる」大切さを心にきざみながら、これからも祖母と向き合っていこうと思います。



わたしの行く道

渋谷本町学園小学校 六年A組 松田 椋良

私がこの「きみの行く道」という本を選んだ理由は、題名が気になったからです。私が高学年になってから読む本は何日もかけて読むような長い物語が多いです。そのため、実際にこの本を手にとったときは絵本のようなので少し物足りなさそうな気もしましたが、読んでみると何度も何度も読みかえしてしまうような本でした。

「高く飛べる人たちのあいだに入ってきてきみも、飛んでいくんです」という所に、自分を重ねあわせました。私のまわりにはすごい子ばかりです。たとえば、運動が得意な子、話すことが得意な子、頭の回転が速い子。私が頑張ってもできないような難しい事を簡単にやってしまう友達がたくさんいます。先頭を飛んでいるなど思うのは、小さい頃から夢がはっきりきまっていて、夢に向かって努力をし続けている親友です。私も、六年生になって、目標が見えてきて、自分なりに努力をしているので私もそんな人たちと一緒に飛べるようになったと思います。

「みんなは飛んでいっちゃって。きみは宙ぶらりんのまま、おきざりにされちゃって。」この文にはっとしました。その先には、がたがたのスランプがまっているのです。思い通りの結果ではない時、私はこんなに頑張っているのに、と辛くな

ってしまう時もあります。いつも忙しくて、時間がなくて、何も考えずに遊んでいられたらいいのに、と思ってしまうこともあります。しかし、それだけではだめなのです。それを実行してしまったら、この本でいう「待つところ」にたどりついてしまいます。何もせず待つのは楽で、誰もが簡単にできることです。特に、「イエスカノーを待っている」という部分ではぎくりとしました。私は、ついつい自分で考えずに人に答えを頼ってしまうところがあります。考えることが面倒になってしまいます。でも、「ちがう。そこはきみの行く道じゃない。」とはっきり否定してくれています。私も、待つだけのダメな自分ではありたくないです。

「ひとりぼっち」「でも、きみは進む。」「自分の問題にひるまず、きみは、ぶつかっていく。」「迷ってとうぜん」このようにたくさんの私に必要な言葉をこの本はくれました。たまに、「待つところ」に行ってしまうことはあっても、失敗することはあっても、理想の将来の自分を思い浮かべながら、出来ることから頑張っていきたいです。六年生になって、今までの消極的な自分から積極的な自分に変わりたくて、いろいろなことに手をあげています。緊張して、どういう風に見られているか分からないし不安だけど、自分なりにこれからも続けていきたいです。そして、私はたくさん勉強して、努力を続けていきたいと思います。